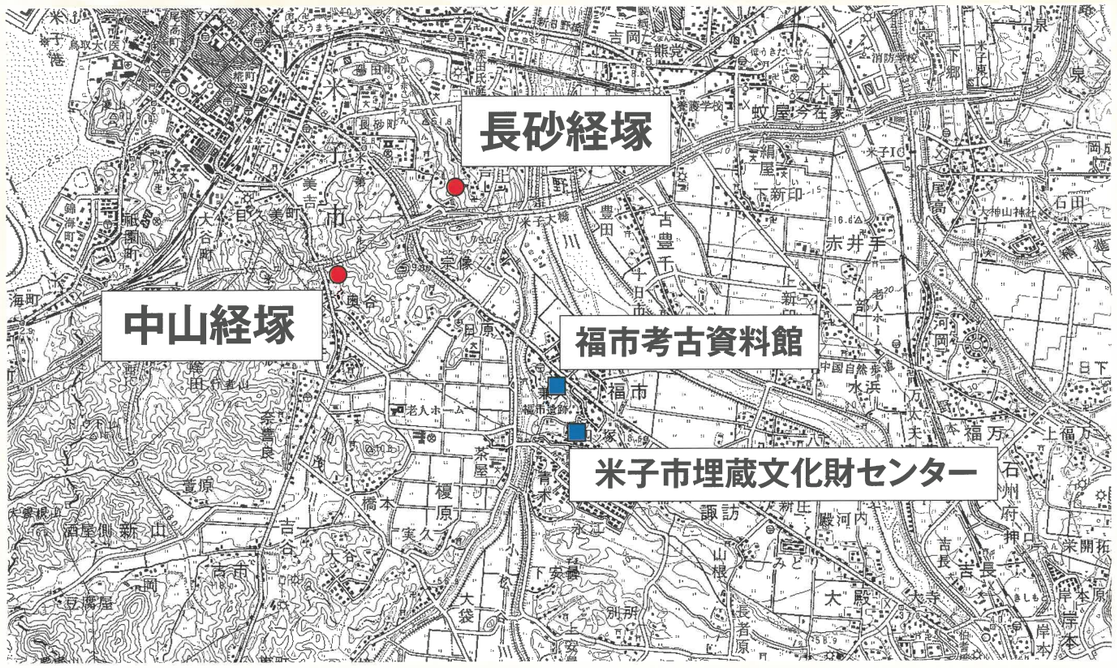


長砂経塚と中山経塚の位置推定図

【米子市福市考古資料館】
福市遺跡から出土した遺物等を展示しています。
●入 館 料　無料
●開館時間　9：30～17：00
※ただし入館は16：30まで
●休 館 日　毎週火曜（祝日の場合翌日）
年末年始（12/29～1/3）
〒683-0011 米子市福市461-20
TEL・FAX　0859-26-3784
https://yonagobunka.net/kouko/

【米子市埋蔵文化財センター】
市内遺跡出土の遺物を展示・収蔵しています。
●入 館 料　無料
●開館時間　9：30～17：00
※ただし入館は16：30まで
●休 館 日　土日・祝日
年末年始（12/29～1/3）
〒683-0011 米子市福市281
TEL・FAX　0859-26-0455
https://yonagobunka.net/maibun/

問い合わせ　米子市文化振興課
〒683-8686
鳥取県米子市東町161番地2
TEL 0859－23－5438
FAX 0859－23－5414
E-mail：bunka@city.yonago.lg.jp

このリーフレットは、令和6年度に「市内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を活用して作成しました。

鳥取県米子市指定有形文化財（考古資料）

長砂経塚（ながすな きょうづか）と中山経塚（なかやま きょうづか）

長砂経塚から出土した経筒と経巻

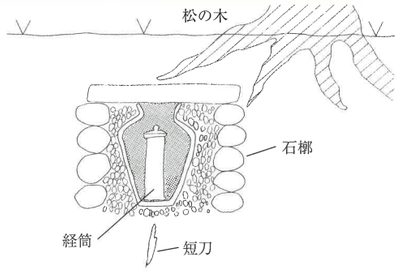
米子市・米子市教育委員会

経塚とは

経塚とは、仏教の経典などを容器に収めて地下に埋納したもので、平安時代の後半頃から日本各地で造られるようになりました。ちょうどその頃には、釈迦が亡くなってから二千年が経つと仏の教えが滅びる「末法思想」と呼ばれる考えが広がっており、永承 7（1052）年がその始まりの年とされていました。このため、日本各地の有力者がこぞって経典を地下に埋めて仏教の教えが途絶えないようにしたといわれており、最も古いものは、関白藤原道長が寛弘 4（1007）年に奈良県の金峯山に埋納した経塚が知られています。後には、自らの極楽往生や現世利益を望むために造られるように変化したとされています。

経塚は鳥取県内では33ヵ所の発見例があり、特に大正時代に東伯郡湯梨浜町の伯耆国一ノ宮倭文神社の裏山から見つかった経塚は、銅製経筒のほかにも仏像や鏡、瑠璃玉などたくさんの出土品があったことが知られており、これらの出土品は、現在国宝に指定されています。米子市内でも二つの経塚が見つかっています。長砂経塚は、米子市長砂町と観音寺を隔てる丘陵上に造られており、近くに所在した寺院との関連が想定されています。中山経塚も、米子市美吉と奥谷を隔てる峠の上に造られています。どちらも集落の境に接して造られていることから、集落との境界付近の山上に経巻を埋納することに意義があったと考えられます。

長砂経塚の経筒と外容器



長砂経塚の埋納状況（聞取）

鉄製の短刀（長さ49cm）

経巻を開いた状態「法華経第六巻」

長砂経塚出土品（令和3年12月1日指定）

長砂経塚は米子市長砂町と観音寺を隔てる細長い丘陵の尾根上に埋められたもので、昭和16年頃に地元の人によって発見されました。その時の様子は、松の大木の下を30cmほど掘ったところ、一辺が40～50cmもある四角い板石があり、その下に丸石を積み上げて造った石槨があったそうです。石槨には玉砂利が詰まっており、その中に壺が置かれていました。壺の中には青銅製の経筒があり、紙の巻物がそのまま残っていました。また、更に石槨の下を掘ると、鉄製の刀が地面に突き刺さるようにして出てきたそうです。伝聞とはいえ、経塚の経巻埋納の様子が良くわかります。

見つかった経筒は、蓋をした高さ26.2cm、直径9.4cmの青銅製で、蓋には宝珠形のつまみがついています。外容器は高さ31cm、口径18.2cmの須恵質の壺で、口縁部には（×）のヘラ記号が刻まれています。経筒の内部に納められていた経巻は、朱墨で書かれた「法華経」8巻です。現在では蝋化して固まっているため、開いて見ることができるのは第六巻のみです。石槨の下から見つかった刀は、長さ49cmの反りのある鉄製の短刀ですが、現在では完全に錆びているため鉄の地金の部分まで無くなっています。

この経塚が造られた年代は、平安時代末期～鎌倉時代前期と推測されますが、埋納者が誰なのかは分かっていません。この当時、長砂町か観音寺にあった寺院に繋がるのかもしれません。

中山経塚出土品（令和3年12月1日指定）

中山経塚は、米子市奥谷の北、鳥取県道102号線沿いの峠に接する小丘陵の上にあった、宗像40号墳（中山古墳・消滅）の墳丘上に造られた経塚です。昭和30年に古墳の発掘調査が行われた際に、墳丘の盛土内から横向きの状態で発見されました。

経筒は、薄い板を曲げて造られた青銅製で、側面には合わせ目の痕跡が明瞭に残っています。底部は別の丸い板を填めて、2ヵ所を釘で止めていたようです。蓋をした状態の高さは21.6cm、直径6cmの円筒形です。蓋は宝珠形のつまみがあり、見つかった時には蓋のついた状態でしたが、経筒の内部に経巻は残っていませんでした。また、近くからは越前焼の大甕の底部も見つかっていることから、経筒を収納する外容器だった可能性があります。恐らく、鎌倉時代末～室町時代初期（14世紀）頃に造られたものと推測されます。

中山古墳（経塚）の発掘調査には、当時の美保基地に駐留していた進駐軍のヘンリー・ベルローズ軍曹も参加しており、同氏が撮影した調査中の写真が残されています。

中山経塚の調査風景

中山経塚の経筒出土状況

中山経塚の経筒と蓋、底板

中山古墳の横穴式石室天井石

中山経塚から出土した越前焼大甕の底部